

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第12回 【けものの匂い】

第6回で父が洋服仕立職人だと洩らしたが、どの職場にも独特の符丁がある。外部者にはその言葉だけでは内容が読み取れない。少年時代、飛び交う生地の名称は外国語のようだった。事実、外来語ではあるが、アルパカは「或る馬鹿」、ギャバジンはその音が可笑しく、カシミヤは「いいタツチ カシミヤタツチ このタツチ」(野坂昭如作詞)と楠トシエが声高に歌っていた。

後年、カシミールという山岳地方の山羊の毛と知って驚いた。ギャバジンはイギリスの羊毛で織った丈夫な裏地。アルパカは南米高地に育つ首の長い駱駝科の動物。家には異国の動物が闊歩していたというわけだ。

「おい、柵に積んであるアルパカを持ってこい」「親方、カシミヤとギャバはどこですか」名前の記憶。

見たこともない動物や風景を想像した。そういえば、布地をととのえる「地のし」があった。仕立てた時に生地の伸び縮みを抑える作業だ。霧を吹きかけ、ジュツとアイロンをすべらせる。立ちのぼる湯気にふつと獣の匂いがした。年の暮、紳士洋服店では追込み仕事の真つ最中。冬物一番人気の生地名だったのだ。